

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十八年四月廿五日印刷
昭和二十八年五月一日發行

第十九卷

五月號

五月號

淨土



蓮久

特輯 戰犯と信仰

善導大師のおことば

もし人々が救いをいたゞくつとめとして、口にいつもみ名を唱えていると、み佛はこれ聞いていて下さる。身でいつもみ佛を敬い禮拜していると、み佛はこれを見守つておいでになる。心の中でいつもみ佛を思いつゞけていると、み佛も思つていて下さる。われわれがみ佛を、いつも心に思つて忘れなければ、み佛もまたわれわれを心に思つてお忘れにならない。つまり、み佛もわれわれとの、口と身と心の三つのはたらきが、いつも離れないから、これを親しいあいだがらというのである。

(服部英淳謹譯)

浄土 五月號 目次

春 曉……………吉田絃二郎(1)

戦犯と信仰

戦犯に光を……………關口慈光(4)

戦犯死刑囚と入信の機……………田中博夫(5)

特輯 獄中に作る刺繍心經と念珠……………田端正雄(14)

巢鴨プリズンに戦犯を訪ねて……………編輯部(18)

童話 お山の幼稚園……………石塚壽明(30)

創作 吉 水……………東山未知夫(19)

隨筆 栢榴の花……………今井宇三郎(28)

學校 東山高校……………編輯部(25)

探訪 藤田先生と「風媒花」……………安居香山(23)

現代短歌……………(21) ~ 書評……………(21)

表紙挿畫……………松濤達文



春 曉

吉 田 絃 二 郎

毎朝東の空が白みかゝると窓近い梅に来て鶯が鳴く。

ゆめうつゝのなかに、春曉の鶯の音を聴くのは一年の生活の中もつとも楽しいことの一つである。

雨戸をあけ、はたきをかけるころになれば、鶯は飛んで行つて隣り近所の庭で鳴いてゐる。すると人間のころは妙なもので、自分の鶯が人の庭に逃げてしまつたやうなさびしさを感じる。もともと鶯は大自然のものであり、わたくしたちのものではない。空を飛ぶ白雲や、空を吹く風のごとく、それは大自然のものである。

それだのにわたくしたちは鶯がわが庭で鳴けばよろこび、隣りの庭で鳴けばさびしがる。自分で自分のころ

に明暗の世界を作つて一喜一憂してゐる。

人間の心の明暗にかゝりはりなく、飛び去つた鶯はいつの間にかふたゝびわたくしの庭にかへり来て、のどかな聲で鳴いてゐる。あたかも廣い世界と、無限の空間を狭く閉じ込めて、自らを苦しめてゐる人間の愚かさを笑ふかのやうに。

しかし人間であるからには、何かを欲しがり、何かに執着するといふことは止むを得まい。

白隠和尚が寺内に運ばれて来る庭石を待ちわび、芭蕉翁が旅にゐて、よき草鞋とよき宿を欲しがつたところは

眞人間の情である。

良寛さまは人から借りた本にうつかりして「おれがの」と書いてしまつた。本を貸した人が「これでは良寛さまの本のやうじや」となげいたら「良寛のじやと書いてあらばそんなことになるが、おれがの、と書いてあるから、お前さまが持つてゐる間はお前さまのものじや、わしが持つてゐる間はわしのものじや」といつて笑つた。

良寛さまは或る時子供たちとおはじきをして、その日は大分幸運にめぐまれたらしく、道ばたにしやがんで、しきりにおはじきを算へてゐた。

たまたま通りかゝつた男が

「良寛さまたいさうおはじきを持つてゐなさるな」といつて覗き込んだ。

良寛さまは顔を赭らめて、法衣の袖でおはじきを隠すやうにした。

良寛さまにも「これはおれがのじや」と、おはじきを

欲しがるところはあつたであらう。

國上山の春が來れば良寛さまは鶯を聴いたであらう。國上山に秋が來れば良寛さまは鹿を聴いたであらう。良寛さまには隣りの庭も、隣りの山もなかつたであらう。

良寛さまには春を待ち得たよろこびと、時雨を待つさびしさばかりがあつたであらう。

或る年、わたくしは亡くなつた妻と二人で伊豆の達磨山を歩いてゐた。

風は寒かつたが、眞つ白な雪につゝまれた富士をながめる快霽の日であつた。

尾根づたいに歩いてゐると、麓の桂川の彼岸に、數人の獵夫たちが七八頭の犬を追つてゐる姿が見えた。

猪でも狩り立てゝゐるのだらうと思ひながら歩いてゐた。

犬の吠える聲、つゞいて銃聲が二三度聞えた。

それから二三十分間も経つてからであつた。わたくしたちの直ぐうしろに小馬大の、毛はむしろ黒色に近い動物が近づいて來た。見事な叉角をいたゞいた牡鹿であつた。鹿は桂川を渡つて獵夫たちの群から逃げて來たのであつた。

鹿はおどろいてわたくしたちを見た。

しかし何といふやさしい眼であらう。何といふ美しい眼であらう。菩薩の眼ともいふべき眼である。人間に追ひ立てられながらも人間を憎むことを知らぬ眼である。

わたくしはあのをりの牡鹿の悲しさうな眼ほど愛情をこめた眼を見たことはなかつた。

妻は「どうぞ鹿が助かりますやうに」と合掌して見送つてゐた。

浄土俳壇 高木晴子先生選

兼題 — 新茶・麥の秋 —

主一人新茶を入れて店は閑 （聖） 岩國市 長岡白朝居

老婆と貧しく生きて古壺新茶

いささかの寺財のありて麥を刈る 高知 竹原教圓

いたゞきし新茶の出花先づ彌陀に

知らぬ子に手をふり別れ麥の秋 鎌倉 佐藤初瀨

走り茶や母の手つきを見て居りぬ

雜詠

盧子庵の牡丹の傘や名にしをな 鎌倉 早見君子

花下に賣る玩具の彩の褪せたるを 同 日置草崖

花の雨傘かり戻る夕べかな 同 日置うらゝ

師の便りそらんじて居り春灯下 逗子 笹川菊子

歸り路もこの道行かん花の下 鎌倉 淡路鳴江

心地よき疲れを縁に春風に 選者

下草に落花積りてゆくばかり

これから時季に順じた雜詠とします。

投句をなさりよいと思ひますので。

題にとらはれず折にふれ出來た句をとし

／＼投句なさつて下さいませ。 選者

特 輯

戰

犯

と

信

仰



戰犯に

光を！

巢鴨プリズン教誨師
大正大學佛教學部長

關口 慈光

和解と信頼にもとづくといわれる講和條約が結ばれたのに、いわゆる「戰犯」は巢鴨に、そして比島モンテナルバに、絶海の孤島濠州マヌス島にそのまゝ苦しんでいる。

講和條約第十一條で、舊敵國がきめた通りに刑を執行する責任を日本政府が負つたからである。A級は聯合國の三分の二以上の、B級は判決を下したそれらの國の、許可がなければ、日本政府は釋放することも減刑することもできないのである。

自分等がかほどまでに痛切に味つてゐるこの苦悶と汚濁とを再び日本の子孫に、否、世界の人類の何人にも繰返して味わせてはならない。これこそが「戰犯」とよばれている人々の痛切なる願である。

「戰犯」なるものを生み出さないためには、先ず戦争そのものを無くさなければならぬ。再軍備促進の代償として「戰犯」が釋放さ

れるというようなことであるならばそれは眞つ平である——と頑く、ななまでに戦争を惡んでいるのは、ほかならぬ「戰犯」である。

獨立日本の自尊心からも、かゝる不合理な存在は許し難いと各方面から「戰犯」釋放の世論がまき起つた。それは主として法理論と人道上の見地から強く主張されたのであるが、むしろ宗教的信念から發する平和運動として推進されなければならないと信ぜられる。

すなわち世界の歴史上に前例のない「戰犯」なるものを敢えて生み出した其の根底に流れている或る何物かを深く洞察して、それこそがとりもなおさず戦争を惹き起す元凶無明であることを摘抉し、かゝる「戰犯」を解消することこそが戦争の根源を芟除することであり、平和を確立する本質の道であることへの信念に立つものである。「戰犯」に同情したり、釋放に盡力するなどは右翼的、逆コースで

あり、再軍備調に通ずるといつたような批判も行われるが、それは「戦犯」なるものに對しての無知と誤解にもとづくものである。これほどまでに「戦犯」は誤解されているということこそが、「戦犯」の胸中を最もむごたしくかき撚るのである。「戦犯」への同情はこの一點にこそ先ず集注せられるべきである。

「戦犯」とは何であるかということをよく解つて欲しい。一人でも多く「戦犯」の真相を理解して呉れること、これこそが「戦犯」への一番の慰問です、というのが今なお「戦犯」として苦しんでいる人々やその家族たちの血の叫である。「戦犯」の真相が誤解された

まゝでは、死んでも死に切れない、というのが「戦犯」として刑死・獄死した一千余名の遺族のつきつめた心情である。「戦犯」というものが、今の日本になお残つていているという認識だけはだん／＼に深まつて來たが、どんな人がどんな事のために「戦犯」とよばれ、處刑されてしまつたのか、投獄されているのか、「戦犯」の真相を理解している者は末だ／＼極めて稀である。

戦犯死刑囚と

入信の機

田中博夫

渠鳴服役戦犯

一、お寺参り及無宗教時代

私の故郷の寺は淨土宗である。部落の大部分の家は其の壇家であり寺と壇家との關係は密接であつた。花祭り、春秋の彼岸は勿論の事、冬季毎月八日にはお説教があつて老若男

女が續々とお寺へ詰めかけたものである。冬の閑雪に閉ぢ込められて他に慰安を持たぬ部落の人達には、お寺はお説教を聞く他に一つの社交場でもあり寺は部落の生活の一部であつた。私も幼時叔母や母に連れられてお寺参りに行つたものだ。子供は子供で和尚さんの

お話に對する期待の他に普通ならば晝間しか逢えぬ友達に逢える事が魅力であつた様だ。それでも何度も話をきく内にお釋迦様や法然上人、親鸞上人の事など子供ながらに諒解した。特に涅槃會に飾られる涅槃像や彼岸會の地獄極樂の圖は今に印象が深い。こうした幼時の宗教的環境は入信の素地を作り上げて呉れたものと思われる。

中學校へ上る頃は部落の友達も夫々離散し又勉強も忙しくなつてお寺参りは跡絶えた。そして卒業、就職、入隊と村を離れるに及んでお寺とは縁が切れて了つた。以來十年引續いて軍人生活を續けたのであるが軍人には軍人勸諭がありこの奉唱實踐が要求されるので他を顧みる暇もなく、また内省よりも前進的

のこの生活には宗教は縁遠いものである様に思われて過したのである。

昭和十七年十月、ジャワに出征しそこで終戦を迎えそして引續き抑留生活に入つた。

此間「インドネシア」獨立運動者との破局的な危機への遭遇や「シンガポール」の「チヤンギ」刑務所の文字通りの地獄の底に呻吟した事もあつたが信仰を考へるに至らなかつた。いや傷心と肉體的苦痛を堪へるに急でその予猶がなかつたと言つてよからう。

二、死を見つめて

私が宗教の力により死に對する考へを固める必要に迫られたのは「ジャワ」で戦犯として法廷に立たされる前であつた。私達の裁判の前に既に幾つかの戦犯裁判が行はれ死刑の比率は四人に一人の割合であつた。そして各ケースの責任者は其の中の最高の者と同じ刑を受けた。この率で行くと私はまづ絶對助かる望はなくまた人もそう見て居た。そこで坐して死を迎へるか、又は逃亡によつて生命を守るかを決める必要に迫られたのである。

一體私達はこの裁判がどうしても納得が行かぬのである。私は憲兵として従軍し當時抗日分子の檢舉彈壓に當つたのは職務であり、

至上命令であつた。所が現在憲兵の職にあつた者は一人残らず戦犯容疑者として逮捕され極少數の捜査に關係を持たなかつた者だけが釋放され大部分は法廷に立たされたのである。永い戦時中の期間には勿論多少の行過ぎや過失はあつた事は事實であらう。しかしそれが重大な違法のものでなかつた事は自分の信念でもあるし、又逆説的にいうならば今迄無事に過して來た事によつても明らかである。日本軍隊に峻嚴な法がなかつたと誰か言ひ得る者があるらうか。憲兵の職にあつたが故に一律に逮捕され、そして我々の従軍そのものが違法とされ訴追せられるに至つたのである。

之を素直に受入れて戦犯法廷に立つのは裁判に自信を有するか、又はその生を諦めるかのどちらかでなければならぬ。私は悲しいかなこの何れをも持たなかつた。そこで私は逃亡を決意したのである。人は女々しき奴と輕蔑されるであらう。しかし戦は正に終つてゐるのである。最早我々の死は何の意味をも持たない。そして家族は戦時中の忍従の時を過して私の歸還を一日千秋の思ひで待つてゐるのである。私は何んとかしてこの生命を守り通さねばならぬ。

かくして戦犯容疑者の中に幾つもの逃亡計畫が秘かに立案された。そして數回に亘つて實行されその内二つが成功した。私はその時ある事情により遂に之に加わる事が出来なかつた。そして焦躁の内に昭和二十二年七月から予審の取調を受ける身となつたのである。

さてこうなると既に事は自分一個では納まらない。同「ケース」全員の問題である。特に私は「〇〇ケース」の中心として之をまとめてゆく立場にあつた。この責任が再轉して私に逃亡から公判へと「コース」を替えさせた。反撥から忍従への轉換である。其處には生は萬に一つも期待することが出来ぬ。私は死に對する確固たる心構へを確立しなければならぬ破目に立ちいたつた。

當時「チビナン」刑務所の中には宗教に關する書籍と言へば「バイブル」以外にない。

そこで私はまづ幼時に聞いた佛教の教を記憶の中に探つて見た。因縁と言ふ言葉が思い出される。因果と言ふ言葉もあつた。また忍従と言ふ教もあつた様だ。世の中の總ての事柄は因縁によつて現われる。だからこれをなくするには因と縁とを無くしなければならぬ。善人は極樂へ、惡人は地獄へ落ちるのである。

これを私自身に當ててみる。戦時中の過

失は因で敗戦の現實は縁であらう。そこで私は今死刑という果の摘み取りを目前にひかえているのである。

自分の播いた種ならばこの手で刈り取るのに各ではない。麥の種を蒔いたら麥を刈り取るのは當然である。而し自分の力以外の敗戦と言う縁が加つて出来上つたこの果實は質量共に全く異つた恐ろしく過大なものである。佛教の教はこれをその儘に受取つて行けと言うのであるか。どうもしつくり來ない。幼時のうろ覚えの教えでは安心立命が出来ぬ。そこで私は生れてはじめて「バイブル」を手にした。そして山上の垂訓をよんだ。

「惡しき者に抵抗うな、人もし汝の右の頬を打たば左をも向けよ。然らば凡て人の爲されんと思ふ人は人にも亦その如くせよ」

「善き樹は善き實を結び惡しき樹は惡しき果を結ぶ、すべて善き果を結ばぬ樹は代え

歸らざる友出でゆきぬ眞向ひの

鐵の扉は開けられしまま

妻の影^{うつ}の如くひらめきし

たまゆらの身を壁に寄せけり

(スガモ・戸高勝平)

られて水に投入せらるる」

これも又因果の教である。忍従の教である。釋尊は天地の理法を鮮明し「バイブル」は人の行動の律を明示しているが本質は同じ様である。結局惡しき者は審かれる、善を行へと言ふにある。

私は我々の死を贖罪のそれとして受取りたくはない。それは余りにも消極的であり高價に過ぎる。この死を積極的に諒解して行きたい。何か建設的のものへの投入であると確信したのである。

私はそこで個々の經典や成句を探索するのを止めて自分の身についている凡ゆる想念を擧げて死を考えるべく努めた。

(一) 先ず死の内容を考えた。

人間誰しも一度は死ぬものである。今日死ぬのも明日死ぬのも大した變りはない。死とは肉體が減するだけで生命は永遠のものであると言ふ。死は單に質の變化であり滅亡ではない。

又人間とは宇宙の極微粒子に過ぎぬ。一人の死は廣大なる宇宙にとつては何の影響も及ぼさぬ。我々が死んでもあの星は何の變りもなく同じ様に輝き、春來れば花の咲くのに變りはない。我々が最も大切なものと思つて

いるこの生命は實はつまらぬものなのだ。

(二) 戦争の悲劇は多くの人が體驗する所である。我々も亦その一人である。將來、戦には必らず戦犯はつきものとなるであらう。そして我々のように平和が來てもまだその報の爲に苦しめられる人ができる譯である。戦争は再びしてはならない。若しそれを再び試みんとする人があらば、我々を見よ。そして思い留つてもらいたい。こゝに我々死の意義があるのではなからうか。

(三) 今祖國の同胞でさえ我々を極惡人と呼んでいる。而し時が來れば判ることだ。これらの人はその時輕率な言葉を悔みそして戦犯を正しく認識してくれるであらう。この意味に於て我々は祖國の人の胸に生きることになる。

(四) 我々の家族は歎き悲しむであらう。而し諦らめてもらわねばならぬ。人は誰しもその人生に對して責任を有する。涙を拂つて各々の責任に進んでもらいたい。

こう考えて來ると私の胸は明るくなつた。おゝらかになるのである。

鐵格子の外を見ると雀が自由に遊んでいる。窓の下を「インドネシヤ」の囚人が屈託のない顔をして通る。私がああ雀や「インドネシヤ」だつたら今このような苦しみは受け

ぬであらう。日本は喬木であつた。喬木故に風に弱かつたのである。自分は祖國と運命を共にするものである。何の悔ゆる處があるか。月が懸つてゐる。あの月の下に平和な夢を見てゐる住民の姿がある。我等が「ベツト」の中で勝者の夢を結んでいた時彼等は職を追はれ暗夜を彷徨していたのだ。そして今は正に反對の立場にある。誠に無常である。無常は釋尊の説かれた宇宙の眞理だ。我々もこの眞理以外にはみ出すものではない。私は私なりに死の意義を掴んだのである。この上は只管に柔順で行けばよいのだ。

私は此處に於て釋尊の説かれた理法的一端を私なりに諒解したのである。表からは入れなかつた佛の道が裏から開けていたのである。このような心境の下に予審が終り公判前の辯護人との面會をした。彼は私に極刑は免れないだろうと太鼓版を押してくれた。私には何の動搖も起らなかつた。辯護人は又只一つ生への道がある。それは積極的に買つて出ることである。今迄の各「ケース」は責任者は「若し自分の隙に間違があつたらばそれは私の責任である」と出た。而し最早この行き方では古い。一步進んで「それは私がやらせたのである」と出る事であるという。私は

「その方針でゆきます」と答えた。この行き方は確かに危険の標に見えるが私は道徳的に部下に責任を感じてゐる。私以外に極刑者を出さない願ひである。

十一月二十六日から始まつた公判で私はこれを實行していつた。自分の心境を述べる時涙が出た。求刑の結果二十年である。私は自分の耳を疑つた。而し同「ケース」に二名の極刑者を出した。これは私の轉任後の事件の責任を問われたので私としては如何とも仕方のない事であるがいかにも残念であつた。代れるものならば代つてやりたい氣持であつた。

公判の終つた夜一人靜かに反省してみた。この身の生還は何によつて得られたのであるか。それは無理をしなかつた事に因るものである。天地の理法を正しく受入れて、あがきをしなかつた事に因るものである。忍従である。爾來私は無理をしない事が人生を生きる要道であると信じてゐる。

三、戦犯死刑囚の唄

翌二十三年一月私は志願して死刑囚房の世話係になつた。

最初其處へ行つてびっくりしたのは皆の顔が以外に明るい事であつた。そして房の構内

は尊敬と思いやりの雰圍氣が溢れていた。ここに至る道中の嚴さの陰は何處にも見られなかつた。新しく入つて来る人は流石に元氣がなかつたが二、三日も経つとこの空氣に慣れて一樣に先輩に同調していつた。

晝間は朝食後から夕食時限迄交替に構内の散歩が許される。その時間でない人は房内で讀書や執筆をする。散歩時間の人は日蔭へ卓を据えて麻雀を圍む組、散歩時間でない人の房の前へどつかと腰を卸して鐵格子の鐵棒の間から腕を伸して向う側の基磐の上に石を置く人、皆無心に愉快である。あと幾日も余さぬ生命を僅かでも無駄にすまいと遊ぶにも實に熱心だ。

夕食後各自の房へ引き取ると南洋の黄昏は短かく間もなく夜の帳が降りる。房内は電灯もなく讀書も出來ぬので話すより手がない。そこで壁越に大聲の話がはじまる。中には隣の人にあの唄を唄つてくれとせがむ。近所の住人も話をやめて一緒に唄を聞き拍手を送る。

新しく入る人のある時、判決があつて刑が確定した時、減刑で有期房へ歸る人のある時及刑の執行の爲に出發という前の晩にはここだけの演藝會が催される。今夜は何番からと

班長さんが番號を示すとやがて静かな空氣を衝いて唄聲が起る。各々自房から大聲を出して全房に行き渡る様に唄うのである。

處刑に出發の前夜の唄會は最も印象的である。この時ばかりは獨房内に鬼氣が漂う。唄われる唄は各自最も愛好する一つ二つが普通である。順番が來て當夜の主人公の番になると獨房生活の楽しかつたこと、立派に日本人らしく逝きたいこと、處刑はこれが最後であるように祈ると挨拶してから唄うのである。

私は「コンクリート」の床の上に毛布を敷きその上に端座して嘯みしめるように聞くのが常であつた。一通りするといつも就寢の九時が近い。班長さんの音頭で「海ゆかば」が齊唱されそして「今夜の演藝會を終わります。どうか〇〇さんは當所最後の一夜をお静かにお寢み下さい。有難うございました」の班長さんの挨拶で終る。

毎夕投げ込まれる煙草用の火繩が

暗夜一點の火です

窓の邊にくすぶる火繩見つゝおれば

夕べの房にいのち靜かなり

(スガモ・藤原重義)

獨房が靜寂にかえると房内外に虫の音が湧き上つて獨房を包んで了う。時々構外の道をゆく馬車の音が傳わり遠くで汽車の入れ替えのひびきがして夜が過ぎてゆく。

かくして前日の内に散髪も終り遺品にする爪も切り私物は全部整理し送別茶、麻雀の娛樂も楽しみ、そして最後の最も華かな唄の競演も終りさて出發の朝が來る。

起床と共に特に先に出してもらつた逝く人が洗面所の横で祖國に向つて黙禱を捧げている影が映る。朝食は庭で全員の會食だ。日本人炊事員の心盡の御馳走が配られて逝く人を圍んで朝露の芝の上に腰をおろして食事だ。

中央の逝く人の顔の何と明るいことか、今迄の獨房生活中にも暗い影を見たことはなかつたが今朝の顔はまるで溢れる様な自然の笑顔だ。私の約一カ年間の此處の勤務中一人の例外もなかつたことは驚く他はない。そして之を取りまく人々にも何の屈託もない。少い時間の話題はゆく人の氣持に就いてである。まるで子供の時遠足に行く朝のような氣持であるという。それを聞いている人が「そうかなア」と感心すると皆はどつと笑う。これらの人達もやがては同じ道をゆく人である。彼等はまだ競技の選征に向う先輩を送る様な氣

持に見える。而し注意して見ていると其の動作の中に深い思いやりが藏されている事に氣付くのである。食事が終ると一同立つと肅然として祖國を遙拜し「君が代」、「海征かば」が齊唱される。壯重悲痛なるしらべである。

次で送る人は門の内側に一列縦隊に並ぶ。逝く人が一たん房に歸り身支度を整えてこの列の前へ進んで來る。軍帽、白シャツ、半袴下駄ばきの姿だ。白シャツの胸には隣の人の心盡しか構内に咲いている「ピンカ」(獨房の人は「マタハリ」「太陽花」と呼んでいる)花の紅白二、三枝をさしている。左翼から一人一人握手しお別れをして過ぎる。逝く人も送る人も淡々とした態度で握手し合う。中には「冥土で俺の坐る場所も取つておいてくれよ」などと言う人もある。全部のお別れが済むと右翼の前に立ちこちらを向いて舉手の敬禮をする。列中に萬歳が起る。かくして事務室へ行きそこで有期房の日本人の特定の人と面會し「ジープ」で市内「グルドツク」刑務所へ護送される。

四、三途の川

「ジャワ」では大體死刑の求刑があると直に死刑囚獨房へ移され、約二カ月後に判決、

こゝで減刑になると日本人「ブロック」へ歸されその儘の人は死刑囚として一人前となる。そして月二、三回の日本人教誨師の説教が聞かれる。教誨師は禪宗の佐藤師である。師はむずかしいお説教はしない。質問に答える他街の話等面白く話されそして煙草や菓子などを贈つて歸られる。

判決後約三ヶ月すぎると危険期間に入る。何時執行の通知が齎されるかも知れぬのである。この期間に入ると娛樂も少な目にし執筆や身邊の整理に没頭される。

死の通知は一日か二日前に事務室勤務の日本人から齎される。この時は知らせを持った人は眞直に班長の部屋へ入り纏て該當の人が呼ばれて傳えられる。中には碁を打ちかけている内に呼ばれて明日出發の命令を受け涼しい顔をして又もとの碁の座に歸りパチンと打ちながら「明日出發だとさ」と人毎の様に呟いたと言う人もある。正に死を見ること期するが如しである。

ここの人達は皆日本人「ブロック」の人達に深い感謝を持つていた。事實日本人の死刑囚に對する思いやりは深いものがあつた。乏しい食糧を割いて死刑囚房へ廻し勞働の褒賞から煙草、菓子などを届け、更に週二回食膳

へ上る果物をそつくり贈りつゞける人も多かつた。また度々當局の許可を得て激務のかたわら練習した演藝を獨房で公演もし、慰問文の如きは殆んど毎日届けられた。

日本人のみならず當局も死刑囚に對しては可成り寛大な態度で獨房へは特に蚊帳の使用も許し可能な限り散歩も多く許し更に日本人の世話係を認めたのである。この様に外形物質的には割合に恵まれていたのである。

當局の方針は暫く措くとしてもこの日本人の爲にも立派に死ななければと固く心に決めている風であつた。勿論その前に宗教的確信が先行的に把持されていたことが想像される。「グルドック」刑務所へ入ると死刑囚には始めての獄衣が着せられる。ここの獨房にはどうした事か毛布が支給にならぬ。勿論蚊帳もなく「アンベラ」一枚である。獨房へ落付くと「インドネシア」の看守や囚人が寄つて來て一體何をして死刑になるのかと聞く。そこで事情を話すと彼等は可愛そうだと言うので食物、煙草、花等を贈る。

そこへ檢事と佐藤師が訪れる。

檢事は總督宛の嘆願書が却下されたこと、因つて二十四時間以内に刑を執行すると告げる。柔順しく聞く人もある。中には檢事に痛

烈な反駁を加える人もある。それは皆裁判の不公平、からくりを衝くのである。檢事はこうした場合いつも應答に詰り「自分が貴方に死刑を求刑したのは上司の命に依るものである。自分としては如何とも仕方がなかつた」と本音を吐く。

檢事が去ると佐藤師が何氣ない調子で話したり聞いたりする。師は初代巢鴨拘置所の日教誨師の様に覺悟は出來たかの、心境はどうかとのむごいことはきかぬ。互に心が通じているからである。こうして午後の一時を平和にすごす。纏て「では明朝またきますから」と煙草などを贈つて歸る。夜が訪ずれる。最後の夜である。檢事が渡していつた紙と鉛筆で遺言を認め終る。

この刑務所は蚊が多い。また南と言つても夜は冷える。そこで寝もやらず同行の人と壁越しに話をしたり唄を唄い合つたりする。そして疲れていつしかねむつてしまう。この間に佐藤師から貰つた煙草の包裝紙に細々と其の夜の時々刻々の心境を書く人もあつた。これは翌日佐藤師から「チビナン」の日本人の許へ届けられる。

私と同「ケース」のWさんなどは朝の三時まで書き綴つていた。そして最後に「今三時

です。私の生命も後三時間余です。冥土への旅立の爲にこれからねむろうと思います。

「チビナン」の皆様左様なら」としてあつた朝六時に起床、朝の行事を済ませ再び届けられた私服に着替える。そこへ佐藤師が来る。昨夜の模様などを話し合う。検事が来る。

一名の時は文句はないが数名の時は順番を決めねばならぬ。それはこちらで決めるのである。そして階級順か年令順にきめられる。

J憲兵隊の時は七名でこの順序が仲々きまらない。誰も一番を希望する。そこで最後に獨房の一番奥からときまつた。一番奥はSという年若い憲兵であつた。彼は獨房から出ると大聲一番「S軍曹冥土の旅の一番乗り、只今出發します」と名乗つて勇躍出發したという。また同隊の五老大尉は浪曲や小唄が好きであつた。彼は「チビナン」を出發する朝も出掛けに獨房の全員へ「乃木大將と辻占」の

昭和二十五年五月九日獄窓より射す

月光と寢床を眺めて

吾が相も心も既にかはり果てぬ

彌陀に任せてお淨土まいりに

(スガモ・若林清作)

浪曲を一席辯じて來たがこの朝も追分を音吐朗々と唄い終つて出發した。P憲兵隊のTさんはYさんを兄とも頼んで親しんでいた。丁度其日獨立運動で捕つた「インドネシア」青年の執行と重つたので七名の日本人は二日に分けて執行されることになつた。Yさんは當日Tさんは翌日である。Yさんが出發するとTさんは「Yさんはどうして俺を連れて行つてくれないのか」と獨房の床の上へ轉がつて號泣ししかつたという。私はTさんと同隊に勤務した事があつて彼の純情の氣質を知つていたのでこの事を後に聞いて涙を催したのであつた。

獨房を出ると裏の射撃場へ通ずる裏門がある。検事、佐藤師と連れ立つてこの門を潜る。朝の爽やかな空氣を胸一杯に吸いながら歩く。後幾呼吸かの空氣である。Wさんは「あゝ、甘い、甘い」と言いながら幾呼吸もしたという。射撃場のくさむらの上を十五、六米行くと二米位の溝があり、橋が懸つてゐる。J憲兵隊の某氏は佐藤師を顧みて「佐藤さんこれが三途の川ですね」と言つたと言う。更に十數米進むと射場で小高い岡の裾に刑柱が立つてゐる。

その刑柱の前へ進んで立つと腹部の邊を繋

えられ眼帯が施される。

佐藤師は傍へ寄つて話しかける。

十米離れた場所に和蘭兵が構え銃をしてゐる。鑓で指揮官から佐藤師に合圖がある。離れるの合圖である。佐藤師が別れを告げると「佐藤さん、最後迄種々御世話になりました。チビナンの方々によろしく」と禮を言い胸を張つて萬歳を三唱する。陛下の萬歳を唱える人、日本國の萬歳を唱える人、母や妻子の萬歳を唱える人等種々である。中には「チビナン」の日本人の萬歳を唱える人もあつた。

前に記したTさんとWさんは申し合せた様に生前私に「自分は死ぬ時は英語で和蘭當局に感謝しそして世界平和萬歳を唱える心算である」と語つた事があつたがおそらくそうして逝かれた事と思う。

抑留所のNさんは年若い温厚な人であつたが佐藤師と別れるのがつらいらしく「佐藤さん、もう少し居て下さい。淋しいから」と言つて離したがらない。向うでは指揮官が盛に合圖する。佐藤師は「Nさん、私はもう行かなければなりません、いいですか」と言うと彼の眼帯の下から數條の涙がほろほろとこぼれた。そして「そうですか、ではお別れいたします。永々有難うございました」と禮を言

い萬歳を三唱したと言ふ事である。

指揮官の號令一下十丁の小銃が火をふき四發の彈丸が發射され一瞬前まで萬歳を絶唱していた肉體の力が抜け純白のシャツの胸の赤い點が次第に擴つて行く。この瞬間最も印象的であつたのは外語出身の若い海軍大尉Mさんであつた。

彼は年上の部下數名を庇つて自分一人が死刑になつた。花も實もある人であつた。獨房に入ると訪れた「インドネシア」の囚人に得意の馬來語で事情を語り更に「インドネシア」の獨立について語つた。感心して聞いていた「ネシア」から我も我もと贈物が届けられ獨房内の水漕に花が一杯になつた。彼は出發の朝この花を胸から腰の周圍迄一杯に飾り立てて刑柱の前に立つた。彈丸が胸に集中するや、これらの花びらが一時にぱつと空中に舞い上りその花びらが地上に落付く頃彼の生命も亦終つたのである。この光景に流石の檢事、指揮官もアツと息をのんで嘆息したと言ふ事である。

此等の人々の信仰の實狀に就ては私は詳知しない。しかし「デビナン」の獨房に於ける彼等の日常を親しく見、且その後立會つた佐藤師から之等の話を聞いて私にも彼等の信

仰の程度が判る様な氣がするのである。

彼等は斯くして逝つた。祖國の再建を念じて逝つた。彼等の胸に只一つの最後迄氣に懸つていた事は祖國の人々が戦犯を理解してくれる日が来るであらうかと言ふ一事であつた。今思い出しても胸が痛むのはあの當時内地から送られて来る新聞、雑誌の中の戦犯に對する憎惡の聲であつた。祖國の聲であつた。今私は長らえて此處巢鴨から次第に擴つてゆく理解の聲、愛の手を見つめながら四年前を回想して誠に感慨が深い。

英靈よ安かれ。今こそ卿等が渴望していたものが遂に訪れて來つゝある。

「ジャワ」島「ジャカルタ」市「グルドツク」刑務所裏の雜草中の墓地に靜かにねむる刑死六十三柱の英靈が生前遂に果し得られなかつた祖國に迎えられる日も遠くはないであらう。(公旦筆)

五、母の死

昭和二十五年一月内地へ歸還し巢鴨拘置所に入つた。そして母の健在を知つた。母は私が出征する時お前の歸る迄は生きているよ、と言つた。私はそれを信じていたが現實に確め得て嬉しかつた。檢査期間が過ぎ四月に實

兄や妻子が面會に來て母の健在を知らせてくれた。私はこの秋頃には歸れる様な話がある事を傳えた。その秋が過ぎて二十六年を迎えその年の十一月下旬嫂から母發病の通知があり續いて危篤の電報を受領した。私は心が急いて所長宛休暇許可の申請書を書いた。その上實家と連絡して必要な書類を揃えて總司令部へ嘆願する様にした。

十二月初旬兄がこれらの書類を携えて上京し外務省を訪れて翻譯及總司令部へ提出を依頼しその足で私を訪れた。彼は簡単に考えて一緒に歸るつもりで來たという。母は目下小康を得ているという事であつた。兄が歸つてから幾日経つても當局からは音沙汰がなかつた。そして一月九日に受領した手紙では大分快方に向つていと知らせて來た。一月十六、七日は稀に見る寒さであつた。十八日正午再度の電報があり十七日午後母は容體急變して遂に死亡したと報じて來た。

私は四人兄弟の末子で二人の姉は他に嫁し兄が家を繼いでいたが四人兄弟の内母は末子の私を最も愛し、そして信頼していた。私も所謂母つ子であつた。私が内地に勤務していた頃私の轉任の先々へ汽車に弱い身でありながら訪ねてくれ既に一家を持つた私に時々經

濟的の援助迄して呉れたものである。

私は其夜難房の壁に向つて母の靈に默禱を捧げた。二十五日東京に嫁いでいる姉が面會に來て歸郷中の話をした。

姉が母の枕頭に坐つて私さえ歸れ、ば良いのにと慰めると母はオヤと言う顔をして「ひろ（私の事）は歸つてゐるよ。お前はまだ會わないのか、今迄そこに居たが裏庭にでも行つたのだろうか」と言うのである。母の病氣は中風の氣味で身體が利かぬだけで氣は確かな筈であつた。何等おかしい節もなく見舞客には尋常に應對してゐたのである。

姉が實家に滞在してゐる間母は私に就てはこの時以外に一回も口にしなかつたという。

親は不肖の子程可愛いと言う。母の死目にも會えぬこの不孝者を母は何時も念頭に置いた。そしてこの子に對する信頼は遂に彼が自分の枕頭に居ない筈はないと思ひこみ、その想念が母の頭を支配して私を枕頭に現出したものではあるまいか。そして私に關する限りすつかり安心して再び私のことを口に出す必要がなかつたのであらう。これ以外に説明がつかぬ。

私は不安がとけた。母は最後まで私と共に在つたのである。この大不孝者を母はやはり

忘れ給はなかつたのである。あゝ有難い。私は蒲團の中で長い事悶え泣いた。こうして永別した母への思慕は無條件に佛道へ惹いた。

母が私を佛の御前に導いて下さつたのである。

薄幸だつた母、私を心から愛してくれた母は今阿彌陀如來の御手に抱かれてゐる。佛壇の前へ坐つて合掌すると佛の慈悲の御光の中に母の顔が浮ぶ。私は只有難く懐かしいのである。

私は歸るべき故郷へ遂に辿りついたのである。思えば四十年の間天日のありかを知らなからず漠々とした雲の中を彷徨つてゐた末に雲の切れ目に忽然として太陽を拜んだのである。代えるものなき母の死を契機として。

而し私は反省しなければならぬ。母の死は直接の動機であつたが他に重要な縁となつた白蓮社を忘れてはならない。戦犯に絶對の慈悲を垂れ續けて集鴨人千余名の心の心柱となつてゐる白蓮社である。因のみでは果は實らない。縁を必要とする如くに入信も亦白蓮社に負う所大である。

私たちが集鴨に歸つた當時は白蓮社田島先生の御法話が集鴨「ホール」と呼ばれる「バラック」建の「コンクリート」床の上で行わ

れた。日も射さず燠房もない冬の御法話をこの場所で續けられる老先生の慈悲は涙ぐましく思われた。其後法話の場所は立派な施設のある集鴨「テアトル」へ移され、白蓮社の廣大無邊なる活動は續いてゐる。私達の信仰を鞭撻される如くにである。

私はなるべく多くの時間を合掌で過した。而し此處の難房ではそれもなり兼ねる。又回向をするにしても出來得れば屬する宗派の法に則つて行き度いと思つてゐた。

二十五年十月白蓮社に應える爲所内同信を集めて白蓮會が結成された。その活動の一つに各宗の讀經會が出來た。私はここで淨土宗のおつとめの仕方を教わり毎週土曜日の田島先生、關口先生の御法話を拜聴すると共に日曜の朝所内觀音堂に於ける勤行に参加して信心の喜びにひたつてゐる。

かくて私の母の導きと白蓮社の恩によつて私なりの信仰を得たが、この程度のものが眞の信仰と言えるかどうかは私も疑いなきを得ない。

然し現在ではこれで満足してゐる。私の信仰がこれを土臺として徐々に開けてゆく可能性があるのを信じるが故にである。（昭和二十七年二月十日記）

獄中に作る刺繡心經と念珠



田 端 正 雄

巢鴨服役職犯

昭和二十一年十月十七日、馬來ベナン刑務所より「クアラランブル」に移動してから、戦犯局調査班係員の數回に亘る事件關係の取調も終り、唯裁判を待つのみとなつた。今度の裁判は必ず死刑を宣告されるものと豫想し、裁判當日迄家族に送る遺品を残さねばと色々考へてみた。然し遺書を書くにも鉛筆は許可されていない。若干の被服は事務室に保管しているが、家族宛には送つてくれない様子で、先づ思付いたのは支給された綿布に摩訶般若波羅蜜多心經全部を刺繡し遺品として同縣人某氏に依頼しようと思付いたのである。然し針及糸は許されていないが作業に出た際針金を拾い検査に發見されないよう獨房に持込み又布切などを收集して糸をとり苦心に苦心を重ねて約二ヶ月間かかり漸く綿布に

完全な刺繡が出来上つたのである。當時は作業終了後ブロックに入る場合は必ず監守の嚴重な検査が行はれ、獨房の検査も毎日のようにあつた。針金の如き違反物發見された場合懲戒處分は當然覺悟せねばならない危險な仕事であるが出来上つてからは毎日の作業に出て行く際首にかけて行けばタオル代用で検査も無事に通過し安心して携行できたからである。苦しい時、悲しい時には自作の刺繡摩訶般若波羅蜜多心經全部を唱えては、自分を慰め裁判の日を待つたのである。

二十二年の正月を迎えたが裁判を前に控えて非常に淋しい正月だつた。一月十日作業に従事中突然事務室より呼出ありて、多分事件關係の事だろうと想像しつつ、監守に連れられ事務室に行つてみると、日本側辯護士が控

室に待つて居り、愈々十三日より「クアラランブル」軍事法廷に於て裁判が行われるとの事である。本日より二日間訴訟狀に基き辯護士との打合を行う事になつて居り第一回は約二時間で打合も終り、明日の事項を計畫して少しでも事件を有利に轉開すべく腹案を立てたのである。辯護士の方でも相當努力してくれて居る。二日間に亘る辯護士との打合も終つたのであるが、裁判前日を控へ仕事も手につかず落つかなかつた。無罪とは絶對考へられないが死刑を宣告されるか有期刑になるかの境である。一月十三日朝起床前獨房の小窓より外を覗いて見ると一面にくもつて雨でも降りそうな天氣だつた。今日は裁判初日である。綿布に刺繡した摩訶般若波羅蜜多心經を腹に巻き、朝の糧食を終ると間もなく監守に連れられ事務室に行つた。正面に掛る時計は午前七時三十分だつた。既に私を護送してゆくM・P四名は事務室に待つて居り、急いで保管して居た私物の軍服と着換え、軍事法廷に臨む準備も整え待つて居ると兩手に手錠をかけられ出發時間が來たと見え指示された小型トラックに乗車したのである。M・Pも私の周圍に乗込み、嚴重な監視の下に小型トラックは出發、軍事法廷に到着したのは午前

八時四十分だつた。開廷は午前十時からと云つてゐるから後一時間餘りあり、其間法廷控室でM・Pに監視されつゝ休憩し時間の來るのが待遠しかつた。開廷の十分前兩手の手錠を開錠し被告席につくと間も無く裁判長少佐一名、判事大尉四名、檢事少佐(印度人)それぞれ着席、日本人辯護士及通譯官は檢事の反對側に着席してゐた。法廷の傍聴席には新聞記者及寫眞班を初め三十餘名の原地人が開廷は今かと時間を待つてゐた。愈々時間となり檢事の論告が終り、檢事側證人の各自證言で一日がすぎた。續く六日間の裁判も無事に終了したのであるが、其間自作刺繡の摩訶般若波羅密多心經を一日として手放すことなく、終始携行したのであつた。

明日は裁判の結果を宣告される判決日である。日本側の辯護士も相當強行に辯論してゐた。然し本事件の裁判状況を顧れば我に勝なき感じがしてならなかつた。翌朝、朝の朝食が終り肌身放さず携行して來た綿布に刺繡の摩訶般若波羅密多心經を、若し今日の判決に死刑を宣告された場合を考え、同縣人某氏に渡し家庭に送つて置くよう依頼し裁判状況を話してゐると事務室からの呼出で監守に連れられてゆき、暫く片隅に腰を下して待つて居

るとM・P四名の乗車した小型トラックは本門前に到着したのである。M・Pは私の兩手に手錠をかけると早速乗車の指示があつて乗込んだ。私の周圍にM・Pも讀いて乗車し、軍事法廷にとトラックは出發した。商店街は早くから賑つて市場附近の人出は特に多く見える。法廷に到着し開廷時間まで約三十分ある其間控室で色々最後の辯護士との打合も終り十三日から一週間の裁判期間中一生懸命努力してくれた辯護士に感謝し此上は死刑の判決を宣告されるのも何等心残りが無い嬉しい氣持だつた。開廷時間は午前十時であるが、そ

ろ／＼時間が來たと見えM・Pに連れられ被告席に着くと裁判長、判事、檢事、日本側辯護士、通譯官はそれぞれ着席、傍聴席には新聞記者を初め一般傍聴人は毎日變らぬ三十名餘りが、深重に開廷の時間を待つて居た。法廷はシーンとして靜かだつた。檢事は最後の全般に對する論告續いて日本側辯護士の辯論が終り、十五分間審議し判決を宣告されるのであるが、其間控室で休憩再び被告席に連れ出されて間無く裁判長以下着席、裁判長は私に對し絞首刑の判決を宣告したのであるが、もとより死刑は覺悟してゐたものの一時は非常に淋しい感が胸に湧上つて來た。裁判長以下

關係者は引揚げ十三日より一週間に亘る裁判も終幕を閉じた。

絞首刑の判決を宣告されて控室に連れられてゆくと辯護士が來られ、最後の手段として減刑歎願を申請せよとの辯護士の勧めにより職務柄減刑の見込ないものと思いつゝ言はれた儘に歎願書に署名し歎願を願つたのである。辯護士と別れを告げてM・P監視の下に控室に待機して居ると刑務所より差出しのトラックが到着M・Pに連れられ乗車、法廷を出發した。トラックは商店街を走つてゐるが今日限りの見納と思えば各店に陳列してゐる各種物品は特別美しく見え、道行く人達も一層楽しく賑やかに見えた。

午前十一時四十分監守に連れられ死刑監房に入ると既に絞首刑の判決を受けた日本人某大尉、某警部、某通譯の三名と現地人三名がそれぞれ獨房に一人宛收容されてゐた。死刑監房は全部で七獨房に別れて居り部屋には寢臺なくコンクリートの床に寢起する。中央は廊下になつて現地人監守二名を以て死刑囚人の監視についてゐた。獨房の扉は鐵格子になり後に小窓が一個、小さい部屋で毛布二枚を與えられるのみだつた。

監房の奥側に死刑執行場があり、三名一度

に執行出来る設備になつていた。私が收容された獨房は七號室であつた。生きた屍で絞首臺に乗る一時の待合室だ。收容されてから某大尉、某警部、某通譯と獨房と獨房で互に鐵格子に縋り色々と話合つていたが裁判期間の苦痛が今日何事も忘れ氣分も落着いたためか睡氣が出てならないが裁判状況を語りつゝ、我々は相互に最後迄頑張つて元氣で立派に死んで行こう、國家のために働らき終戦後戦犯の身となつたが決して恥ずるものではない國家の犠牲者である、必ず國民が認める時が来るものと思ふ、最後の花をこの絞首臺に咲かせて死んで行こうと話したのである。

懐かしい祖國に歸り家族との再會も考えられない現在の狀況に於て佛に縋る外何も考える事はない土壇場に落込んだ私も、これから三十日餘の死刑執行待期中、一生懸命佛敎を信仰し立派に死んで行きたい氣持で、暗記した摩訶般若波羅密多心經を毎夜唱えたのであつた。亦かねがね現地人から聞いていた晝食のタビオカ(芋)を練り念珠を作らうと思つた。タビオカと言つても三切に若干の煮豆が入つていただけで粗末な食事だ。タビオカを絶食し練り始めたのだつた。某大尉はタビオカを練つて何をする、念珠を作りますよと

言いながら約一時間餘り練つたが練方が完全でなかつたためか固まらず失敗に終つたが念珠を作る一念から再び次の日の晝食を絶食し今度は失敗せず完全な念珠を作ろうと一生懸命練つて練つて練通し二時間餘練つた。タビオカで念珠を作る場合は完全に練らなければ珠玉が固らないと聞いていた爲今度は完全に固く出来上るものと内心嬉しかつた。一晚中かゝつても出来上る迄就寝しない決心で珠玉を作り始めた。夕食を分配された時は既に八〇個の珠玉が出来上り某大尉、某警部、某通譯は各自の獨房から出来るかゝと叫掛けて来る。今度は完全な念珠が出来上りますよと言いつつ餘念なく九〇個、百個と作り上げたが佛敎に乏しかつた私は確實な念珠の珠數が判らない。某大尉、某警部に尋ねて見れば百八個と聞き、百八個の玉數が出来上つたが珠玉を通す紐がない。今夜中に完成せねば乾燥しきつて紐を通すに困難であり、又完全な念珠が出来上らないと思つたからズボンの紐を引切つて糸を解き二尺餘の念珠の紐が出来上つた。扱て穴をあけるに針金は勿論入手出来ないから當日死刑監房の監守二名は馬來人だつたのでマツチの軸を半分でいいから借してくれないか終れば返納するといった處、何を

するかとたずねたので、珠玉に穴をあけるのだと言つたら早速ズボンのポケットからマツチを取出し一本の軸を私の手に渡してくれたのである。受取つたマツチの軸一本で十個二十個三十個と紐に百八個の珠玉を通し終つたのは午後十時三十分頃だつた。他の者は全部冷たい獨房で故郷の夢を結びつゝ就寝し靜かな監房は只監守の巡回する靴音が遠くなり、近くなり聞えて来るのみだつた。

概ね出来上つた念珠を手に取り眺めては嬉しくてならなかつた。珠玉は乾燥するに従つて幾分小さくなるので明朝完成する豫定で、念珠を枕元に置き冷たい床に就いたのであつた。

一月二十七日の夜は暑い晩だつた。毎日希望のない「生きた屍」生活に日を過しつ鐵格子に縋り練迄同じ事を夢中に話していると不意に一匹の蝶々が廊下の電灯目がけて飛込んで電灯の周圍をしばらく飛廻つて居るのを眺めて居た。某通譯の獨房にとび込み廻つていた赤茶色の特殊美しい蝶々だつた。某通譯は何か明日變つた事があるに違いない。虫の知らせであると言つていたので、減刑の知らせだよ心配せずに話を続けようと相互に郷里の話を續けたのだつた。然し某通譯は蝶々が氣

にかかると見え絶えず天井を眺めて明日は必ず死刑執行の言渡が来る豫感がしてならないと言つて居つたが、某大尉も五十日以上日數も過ぎ死刑執行の既に来て居り、只命あるのみとなつてゐる、心配するな君は減刑で俺は死刑執行の言渡が来るのだよと言つてゐる。某大尉も何んだか落着かない態度であつた。獨房を飛び廻つてゐた蝶々も何時の間にか何處かに飛去つた。多分後の小窓から出たのだらうと某通譯が話してゐた。

翌朝八時頃だつた戦犯局員大尉以下、所長副所長通譯官が監房に入つて來たので何事だろうと思つてゐると某通譯の獨房の前に立止り一通の書類を擲げ某通譯に對し嘆願書は却下され明朝七時絞首刑を執行するとの言渡だつた。某通譯は一時は顔色も變り茫然としてゐが、人間は一度は死ぬものだ最後迄笑つて死んで行きますよと言つた。彼の氣持に深く感激したのであつた。十一時死刑執行官が監房に來ると早速某通譯を獨房より連れ出し、體重を調べ再び獨房に收容されたが、以前と異り朗かに見えた。死刑執行の日が早いか遅いかの違いで必ず吾々も君の後を追つて冥土の旅に出る體だ。一足先に行つて三途の川で待つていてくれと言つたものだ。

晝食のタビオカ(芋)も最後だと話しながら喰つてゐる某通譯に、殘る私達現地人と共に慰めつゝ晝食も終つた。夜は遅くまで最後の送別の宴を催し賑やかに歌を唄い色々話合つた。時間は刻一刻の絞首臺に近くなつて居る。某通譯の氣持はどうであらうか。朗らかに唄う彼の聲は靜かな死刑監房に牙えて聞えて居た。

翌朝七時立派な態度で「天皇陛下萬歲」を三唱し絞首臺の露と消えた。殘る私達三名も近く死刑執行の言渡しが来るものと待つてゐる時某警部は十二年に減刑の言渡を受け死刑監房より出され他のブロックに移された。殘るのは某大尉と私の二名に、現地人三名である。愈々淋しくなつた。死刑監房では話もつきて自作の念珠で念佛を唱えては自分を慰めてゐた。三月十三日午前七時三十分監守長が突然私の獨房の扉を開錠し事務室に連行されたが何事だろうと思いつゝ事務室にゆくと早速所長室に通され、裁判當時の辯護士及通譯官、戦犯局より大尉一名が待つて居り、辯護士は早速お出度うと言つてくれたものの何の事か判らなかつた。續いて戦犯局係員大尉より十五年に減刑なつた言渡を受けた。私は今日死刑執行の言渡が来るのではないか、今

日來るのではないか一日一日と首を絞められつつ苦痛に堪え忍び五十五日間の死刑監房生活から減刑の言渡を受けた時の氣持は只嬉し涙が自然に出てならなかつた。

私の減刑に對し收容されてゐた日本人全員非常に喜んで迎えてくれた。ブロックに移されてから早速裁判判決日に刺繡した摩訶般若波羅密多心經保管の狀況を聞いてみると事務所に保管したる同縣人某氏の私物品の中に納めてゐるから心配せずにとの事で安心し死刑監房に收容期間作りあげた念珠につき色々話し某氏にも作るよう奨めたのだつた。

それから數週後某大尉はシンガポール、チャンギー刑務所に押送され執行されたのである。今、絞首臺の露と消えた同胞の冥福を祈りつゝ十五年の刑を服役してゐる。

原稿募集!!

我町我寺のお盆 案外知られていない特色のあるお盆行事を全國の會員に伝えませう。四百字詰三枚位。〆切六月五日。其他 童話、篤信者の紹介、大小問わずニュース、希望、をより等々隨時お送り下さい。

送先 東京都港区芝公園五ノ十

法然上人鑽仰會編輯部



巢鴨ブリズンに

戦犯を訪ねて

—編輯部—

小雨煙る晝過ぎ、色々な思惑に驅られながら拘置所に歩を運ぶ足は重い。戦犯を訪ねると云ふ事が、何か割り切れぬものを腦裏にからめて来るからである。如何に考へても、犯人と言ふ言葉が、記者にしつくりと納得させてくれないのである。

鐵條網沿いに廣い所内を眺めながら入口に向ふ。型の如く門衛の警官に要件を述べると數字の書いた四角な札を渡される。入門許可證である。好奇心と、何とはない不安とに驅られながら面會受付所に入る。記者には、尙こうした所に對する或る潜在意識が、何事につけても一喝される様な氣おくれを感じさせてならない。

然し、これ等の不安は刻一刻と抹殺されて

行つた。先づ記者の顔前に現はれたものは、微笑をたゞへた美しい婦人警官であつたのである。

「どうぞこちらへ。どなたに？」

柔かな物腰で一枚の紙と鉛筆を出されたとき、記者はホッと安堵の胸を撫でおろした。そして、次々に展開する拘置所内の事柄は完全に記者の不安が杞憂であつた事を示す外何物でもなかつた。

「山田隆元さんに御會ひしたいのです」

聊か氣をよくした記者はこれからの行動は如何にも堂々と物おしせぬ風態であつた。大きなこのビルディングは、或る會社の一室に通された感じと何等變らなかつた。いや、すました重役秘書に案内されるより、餘程氣樂

な明るさがあつた。

山田氏は所用のため、田端氏に會ふ事とした。死刑から無期に、そして、十五年の有期にと變つたものの、黒く焼けた氏の風貌にはさすがに房内生活の苦勞の跡があつた。已に記事を拜見してゐた記者には(本誌掲載)、初對面ながら百年知己の様な氣がした。

「日常生活は大變な事でせう」

「政府に移管されてからは餘程樂になりましたがね。それでも、こうした生活は、一寸普通考へられて居る様な苦しさではありません。精神的に常に閉じ込められて居る様で」二人は、特に許されて、白蓮會事務所で面會した。山田さんの好意である。それにしても、この中にこうした事務所があると云ふ事にも、何か不思議なものを感じた。人の心を蝕むこの生活に、佛教の溫い薫りが大きな力となつてゐるのである。

「どんな日常生活ですか」

「これを御覽下さい。概略書いてありますから」

此處に来る人が誰しも聞くと見えて、己にガリ板ずりの印刷物があつた。

「巢鴨拘置所生活の概況」と言ふこのパン

フレットには、「日課時限及起居」「勞務に就いて」「給與について」「教育」「娛樂」等詳しく書かれて居た。

「給與は充分です。たゞしアルコールは一切禁止です」

そう言へば、面會受付所には、「飲食品の差し入れは一切禁ず」と言ふ一項目が貼つてあつた。

「宗教行事は何か」

「えゝ。こゝには佛教信者の外にクリスチヤンも、又その他の信者も居ります。勿論佛教が一番盛んですが。」

土曜の午後には法話を聞き、日曜等には、時に法要を営みます。主に般若心經を讀むのですが」

聞けば、今は田島隆純、關口慈光兩師（大正大學教授）がこの法話をされる由。

田端氏の入信及び今の信仰生活は、本誌にも掲げてある通りにて、日々、この命を續けているのは、一邊に佛の救いであると言ふ一念しかない。

「何か惱み事は」

「別にありません。死すべき私が、兎も角こうして生きていますから。有難い事です。やはり生きると言ふ事は、嬉しい事です」

唯田舎の父母達の事が心配です。」

氏には年老ひた父母が、和歌山の田島を耕している。四十に近い身で、遠くこの地に生活する心の痛みは、人の子として當然の悩みに違いない。

「吾々佛教徒に對して、戦犯としての希望は」

「そうですね。色々慰問も頂き、大きな力を與へられて感謝しています。若し欲を言へば、やはり私達は一日も早く社會に出て、一人前の人として働きたい。そうした日の一日も早くなる様に、全國の佛教徒が運動して欲しいと思います」

誠に切なる願ひである。已に罪は消えていく。心から懺悔されるこうした人々の心の中に、何の罪があるのだらう。記者は大きく肯く外無かつた。

「將來はどんな生活を」

「勿論出所したら百姓として大いに働きます。そして、不思議にも得させて頂いた佛の教の有難さを身に體して、明るい力強い生活をしたいと思つています。更に、この有難い教を、私のものとしてのみでなく、他の人々にも頒ちたいと思います。」

こう語られる氏は、且つてマレイで死刑を

宣告された時の苦しみ、その中で得た佛の教の有難さ、他の同僚達は死刑に處せられ、自分のみ助かつた不思議さ等、疊の上では味はふ事の出来ぬ思い出を、ボツリ／＼語り續けられた。

今こゝに、どれ程の人が服役しているのか分らぬ事ながら、田端氏と同じ様な感懷を持つている人が多い事であらう。更には、永久に出所の希望も無く、唯、このある命を、この所に持ち續けて行かねばならぬ人も多い事であらう。斷腸の思いに、込みあげて來るものを感ずる。

春の雨は相變らず降り續いて居る。窓越しに庭に一人、二人茶の服を着て歩いていく。やはり戦犯の人々である。

此處には木らしい木もない。やれ櫻見物だなどと騒いでいる世間とは、餘程かけ離れている。明るい所内ではあるが、やはり何か物足らぬ淋しさを漂はしている。

四十五分と規定された時も過ぎたので席を立つて歸途につく。田端氏は態々門衛の所まで送つて來られた。別れを惜しみつゝ一步外に出れば、鐵條網を境にして、娑婆である。紙一重にも當らぬこの境ながら、世界は餘りにもかけ離れている。

記者は急ぎ足に、ぬかるみを電車通りにと向つた。



出 離

さわ／＼と櫻の葉がゆれている。眞新しい旅草鞋が二足並べられた戸口には、朝の日溜りが白く動いている。小さい草鞋と大きい草鞋とが、宿命的な組合せをなして、妙にきびしい氣分を見せてい

水 吉 小 説 (九)

東 山 未 知 夫

る。

小さいのは勢至丸の草鞋、大きいのは觀覺得業のそれである。郎從が昨夜のうちに用意したものと見える。

「十里の道のりは、子供にはちと困難じやが、今夜中には菩提寺へ着けるじやろうて」もう旅衣に身を固めた觀覺が表へ出て來た
「さゝ、姉者人、早く出かけませぬと。」
何かと心を配る秦氏をせかして、一刻も早く勢至丸を連れ出そうとする氣配である。

「勢至菩薩や、早や、草鞋を。」

眞新しい草鞋を着けた觀覺は、じれつたそうに、軽く足踏みをしている。

稚兒の旅装束をした勢至丸は旅笠を片手に走り出て來た。

「母上様、さらば、お元氣で……」

忙しく草鞋を着けて表へ出ようとする。その足許に秦氏が膝を折つて草鞋の紐を結ぼうとする。早く出かけようとする勢至丸と、少しでも長く吾が子に觸れていようとする秦氏との、子と母の指先が草鞋の紐にもつれ合っている。

「勢至や、よく氣をお附けや」

「あい、母上も。」

げにや愛別離苦はまた、勢至丸母子にとつても例外ではありえなかつた。草鞋にもつれた勢至丸の指先に、ぽつりと母の温い涙の一滴が落ちかゝつた。

「日も高く上つた。さゝ早く〜。」

觀覺得業は、氣が氣でない。九才の童子と共に今日は十里の道を歩かねばならないのだ。勢至丸も心は急いでいた。母と離れる悲しみよりも、佛法の門に入る楽しみの方が遙かに大きく思われたのである。勢至丸の袖にすがる母の手を邪険に振り拂つて二三步小走りに觀覺の方へ進み寄つて行く。

「姉者人、いまま少しの辛抱ぢやて。」

「母上様、勢至丸は必ず戻つて参ります。」

これ以上躊躇することは許されなかつた。秦氏も又、これ以上心の亂れを人々に見せたくなかつた。

觀覺の大きな影と、勢至丸の小さな影とが、崩れかゝた館の門の外へと遠ざかつて行く。唯一の肉親、唯一の形見と別れて、たつた、獨りぼつちになつて取り残された秦氏の心の中に、一時にどつと淋しさの感情がこみ上げて來た。わつと泣き出したい衝動に驅られる。泣くまい、泣くまいとする必死の努力によつて、やつと秦氏が此の

場を持ちこたえているのである。

大小の旅姿は、もう向うの丘を登つて行く。丘の上で、此方を振り向いて手をふつている。もう顔は判らない。手を舉げているのが見えるだけである。(第一篇終)

(いよいよ勢至丸さまは、家を出て、佛法の門へと這入られた。これからは勢至丸さまの佛道修行が始まるのである。吾々人間が救われて行く佛道の要諦は何であろうか。難しい經卷の中から、勢至丸さまは、果して如何なる經文を佛法の詮要として探し出されるであろうか。佛道修行を了え、山を下られる成人された勢至丸さまが、吾々にどのような法門を示して下さるであろうか。

私は、今少しく勢至丸さまの佛道修行をさまたげずに、じつと勢至丸さまの御努力を見守りたいと思う。そして勢至丸さまが、佛法の詮要を把握なさるまで、しばらく口を緘そうと思う。私も勢至丸さまの佛道修行を追體驗したいのです。「これこそ吾々人間の生かされる道、救われる道だ。」と勢至丸さまが把握され、吾々民衆の眞只中へ向つて、山を下られるとき、その勢至丸さまの掲げられた教文をいただいて、私は再び皆さまにお目にかゝろうと思います。皆さま、しばらくの間、勢至丸さまに、じつとひとりで修行して頂きましょう。そつとしておいて、勢至丸さまをわずらわさないで置いてあげましょう。)

現代の短歌 (三)

— 吉 井 勇 —

齋藤正二氏は短歌研究二月號に「吉井勇の歌は、誇張することなしに、平安の王朝以後もつとも美しい作品であらう。後世の文學史家が『和歌史』を通觀するとき、これは恐らく西行以後では直ちに吉井勇を頂點に列するであらう」と云われているが、以前から吉井勇は「酒と女に放浪した西行」と評せられ、誰もこの言を不思議に思っていない。

○夏の帶砂いさぎのうへにながながと解きてかこちぬ身さへ細ると①

○やみあがり吉禰がひとり河岸かたしに出で河原蓬に見入るあはれさ②

○君が間に接紙くさのにはひはただよひぬいま人來なば何と云ふらむ③

○かにかくに祇園はこひし寝るときも枕の下を水のながるる④

○つと入れば胸おしろいに肌ぬぎし君ありわれに往ねと云ひける⑤

○伯林ベルリンの戀のたよりを書きおこすインキも薄くなりにつけるかな⑥

○不知火しんかの筑紫の海の遠鳴もなつかしければはるばると來つ⑦

これらの歌をみて來る時、生産者のいぶきでなくして消費者の溜息である事がしれよう。酒ほがひ・昨日まで・祇園歌集・祇園双紙等の歌集にもられたものは酒と女の世界だつた。勇自記の年譜明治四十一年の頃に「既に情痴の味を解し杯中に人生を觀るの境地を會得していた」といつているが「酒肆さかみに今日もわれゆく VERMINE あはれあはれとて人ぞはやせる」等によつて代表される初期の作は不健康そのもので、けつして酒樽をたたいて放歌する明朗なものでなく酒も女も登場はして來るが常に一種

書評

中村 璋 八

飯田利行 共著 正法眼藏の研究
佐々木一雄

道元禪師の「正法眼藏」は今更述べるまでもなく曹洞宗の宗典である。しかしこの「眼藏」は一宗派の經典として僧堂に閉塞してしまふには、餘りにも偉大であり、正に全人類の寶典であることは、既に先賢により屢々指摘された如くである。しかるに、私達がこれを繙こうとする時、一つの問題に遭遇する。それは「眼藏」が甚だ難解であり、その上適當な解説書が殆ど存しないことである。

確かに「眼藏」又は「道元」に關する研究書は少いとは云えない。今これらを瞥見すると、二つの方向よりなされていた。その一つは師家や眼藏學者が、己の見解なり、修業の體驗によつて、これを提唱し、解釋する方法であつて、これは甚だ主觀的であり、又現代人の感覺とは相入れないものがある。もう一つは西洋哲學者、又は思想家が西洋哲學的方法によつてする研究であるが、これらはやゝもすると「眼藏」を單なる哲學書、思想書として扱い宗典としての本來の姿が抹殺されがちである。かく古今獨歩、不朽の名著たる眼藏も私達には近づき難く、又一方眞實の姿を把握する

の陰影をもつてゐる。勇は人も知る如く鹿兒島藩華族の出であり、早稻田大學を中退して迎着いたところは、即ち當時の勇がこれこそ眞實として考えていたところは、實は現實からの逃避に外ならなかつたのだ。明治の末葉と云えば、後期浪漫主義と呼ばれてゐる時代であつたので、かかる獨自な吉井勇調なるものが特異な位置を占めてしまつた。勇の作品は世人の胸を打ちはしたが、より現實的になりつつある歌のジャンルからは遠くはなれてしまつた。勇は三十一文字の形式の中に文學を見出だしはしたが、短歌ジャンルからますますズレてゆくことになる。

消費者なるものは、己を現實の進展の中に求めるのではなくして、己の過去を整理するだけであり、自嘲とか悲嘆とかになつて勇の場合は三十一字の世界があつたわけである。かかる面で短歌の三十一字の固定的形式にこれから頼り切つてゆかねばならぬとすると、文學する事がますます思想の現實的展開でなくなり、思想でなくして、傳統に生きるもの、趣味であり、情緒となつてくる。それは①②③④⑤の歌にみられるごとく、西鶴の作品を歌にしたような物語めいた歌舞伎の舞臺にもみるような下町情緒、江戸町人趣味(町人が頽廢に向い出した江戸末期頃の江戸爛熟期の文化への憧憬をおもわせる)となつてあらわれたのである。さて最後に迎着いた歌境はと云えば⑥⑦の如き旅である。しかしこの旅も文學をするための旅ではなくして、自己の主情のわずらいなき在り處を求めての旅である。過言かもしれぬが、まるで葉平の歌境とでも評したいところであり、吾が思う君いますところを求めての旅なのではあるまいか。紙面の關係上最近の作にふれ得なかつたが、以上によつて大正中期頃から時代の第一線から勇の作品が脱落していつた事も讀者は臆氣ながらわかつていただければ有難い。とは言え、終始消費者文學の代表として三十一文字に生き切つた事に對しては吾々は銘記すべきである。勇は眞の終始歌人である。(28・3・15)

上木葉葉(心の花同人)

○(前回正誤表)一段十行目おおすぎる(おほすぎる)三段十七行目病牀(病床)
四段十三行目27・11・24(28・1・24)十九行目抒情詩(抒情詩)(正(誤))

ことは不可能の状態にあり、この新研究の出現が渴望されていたことは久しい。

が、こゝに闕らずも、宗門に育ち、宗門の命脈を直々に繼承したと同時に、中國言語學・國文學を専攻し、近代的感觉をもつた飯田利行・佐々木一雄兩氏が從來の眼藏研究の成果を集成し、その缺點を補いつゝ科學的方法によつて、新しい眼藏研究の分野を開拓されたことは誠に喜びに堪えない。

この研究は正法眼藏九十五卷の中から、極めて難解にして、しかも思想的にも、宗乘的にも問題を多く包藏しており、「眼藏」を理解するに好箇の資料たる山水經を選び、先ずその道元、乃至眼藏における位置を設定し、更に周く鈔本、版本を求め、校勘、考證を行い、本文の定本を作製してゐる。このような研究は從來不完全であつたが、これなくしては「眼藏」の眞の理解は不可能であることは云うまでもない。以上の操作を経た上で綿密な譯註を施してゐる。この譯は平易簡明な現代の言葉で、現代人に理解出来るよう、これを宗乘的に表現しており、註においては一言一句忽せにせず、言語學的(文法、音韻、書體、文體)考察、語句の出典考證をなし、禪師の眞意の把握に努めてゐる。

この方法は必ずしも完璧とは云えないが、從來の研究には見られない新鮮さがある。

この書が全佛教徒、のみならず眞實の人間によつて、否眞實ならんと希つてゐる人間によつて味讀されんことを切望する。

藤田先生と

風媒花

安居 香山

藤田寛雅先生が遷化されてから、もう丸三年にもなる。あの精悍な風貌が私の眼前から消えたのは、つい最近であつた様に思ふのだが。

先生とはそれ程深い交際のなかつた私ながら、何か強い纏がりを感じるのは、先生がつて浄土を編輯して居られたと云ふ、漢からぬ因縁に結ばれてゐるからであらうか。

事實、私が先生と本當に胸襟を開いて語つたのは、前後を通じてたつた一度であつた。然しそれは余りにも印象的だ。宵のとりは

落ち盡し、ネオンの淺薄な原色の光が、まぶしく照す新宿の某店で、時の過ぎるのも忘れて二人は語つてゐた。

少くも一度主張した事は譲らぬ先生の舌端に引きずられながら、私も負けずに論戰を張つたものだが、終生忘れ得ぬ印象として私の腦裏にある。

話は浄土の編輯にと還つた。先生は編輯の苦心や、抱負について、種々話された。たまに其處に居合せた二三人が、やはり相當有力な雑誌の編輯者であつた。彼等はわれわれの話に雷同し始めた。そして終に

「日本文化を導くものは、われわれ編輯者だ」

等と吹調して、同意を求めて來た。

聊か興奮して居た私は、

「あなた方は、虎の威をかる狐ですよ。單なる仲介者ですよ。いはゞブローカーですね。まあブローカーと云ふ所ですか」

とやつてしまつた。

たゞで收まらぬのは彼等だ。口角泡を飛ばして反撃して來た。余りの物凄さに、聊か度肝をぬかれた私が、へどもどしていると、同じく敵に廻るべき先生が、何時の間にか私の應援辯士になつてゐた。しかしこの論議も、

甲論乙駁でつきず、喋り疲れたお互ひの主張は結局兩成敗の形で收まつた。

二人は、椅子を蹴つて外に出た。已に人通りも無く、僅かに二三の酔ばらいが點在して黒い影を落してゐる外は、餌をあさる野良犬がゐるだけであつた。

二人が左右に別れたとき、新宿驛に向つて行かれる先生の、稍ちどり足の後姿が、不思議と私の頭に残つてゐるのは、何か虫の知らせでもあつたのだろうか。

先生はそれから間も無く、あの悲劇的な最後を遂げてしまつたのである。

何時も新宿のその場所を通るとき、私はしばらく佇んで、しげ／＼とそのあたり見入るのである。

○

今度、宗門出身の新進作家、武田泰淳先生が「風媒花」と云ふ作品を發表され、昨年度讀賣ベストスリーの第一に當選し、今尚ベストセラーを續けている。

先生は、故大島泰信僧正の御曹子であるが異色の作家として、已に文學界に不動の位置をしめてゐる。今までに、「才子佳人」「嬢のすゑ」「愛のかたち」「異形の者」等の作品があるのは周知の事であらう。

佛教と中國文學とコミニズムの洗禮を受けた先生の作品には、汲めどもつきぬ現實の人間探究の跡がある。「實存」する人間の現實を直視するとき、せばめられた世界史のこの一瞬と、私と云ふ裸の人間存在の一瞬とが交錯する所に、生と死の激闘がある。

先生は、廣い視野と、深い洞察力をもつてこの中に鋭い刃を打ち込みつゝ、解剖されて行くのである。

且つて、「未完の神器」と評された先生も、「風媒花」をものすることにより、完全に神器たることを示された。これ又一虎の威をかける」事ながら、われわれも鼻高々である。

○

さて、こゝで私が敢へて風媒花を取りあげた事は、別に批評家面をしてこの作品を云々せん爲ではない。實はこの作品の中に、懐しい藤田先生の姿があらはれて来るからである。兩先生の交友は、淺からぬものがあつた様だ。特に従兄弟にあたる武田先生が、その牙えた筆致で、作中人物を敘述して行かれる本作品には、私は誠に津々たる興味を感じずには居られない。

勿論文學作品であるこれは、事實のまゝではない。そして私は、そうした事等問題にし

てゐない。唯それがどの様にあろうとも、この中にかつての藤田先生をしのぶすがを與へられ、こうした形で再び相會ふ事の喜びに浸つてゐるのである。

「文雄（作中人物の名）の死」。これは本作品を貫ぬく動脈である。僅かの時間の出來事が、三百ページにも涉つて書かれてゐるが、この事實を離れては何もない。

「鎌原（文雄のこと）が死んだのだ。それだけは確かなのだ。」

七色の獨樂が急旋迴で示す、あの灰色の唸りの中で、しつかりと掴みうる唯一のものは鎌原文雄の死であつた。それだけは、うねりくねる海鼠の如き「現在」の背に、一箇の不動の點を印したのだ。

（風媒花二九六頁）

と書かれてゐる作者の心底にも、又この「文雄の死」が、すなはち「先生の死」が、モチの様にしつこく、くつついてゐるのである。そして藤田先生こそ、正に「未完の神器」で終つた故に、武田先生も惜しまれてゐるに相異ない。それは大器のみの知る世界であるのだが。

文雄が何を意圖してゐたか、作品には終に明白にされてゐない。彼の残したと云ふ日記

も、終に公開されずに終つてゐる。残念な事だ。

それでも、彼の遺児露子は、父性を受けて幼い女傑となつてゐる。こゝにも武田先生が、藤田先生に望まれた一端が、せめてもの形で表現されてゐるのではなからうか。

いや。武田先生がどんなに考へて居られようと、私にはそう寫るのだ。そして、若し先生が生きて居られたら、風媒花でも明白にはされなかつたのだが、必ずや何事かを爲し遂げ得た大器であつたと思つてゐる。

返らぬ繰り言であるが、口惜しい事だ。

先生の亡き後、二年目にこの本が出た事はよい追善であつたと思ふ。そして、今や先生は、日本中の讀者の心の中に生きつゝあるのだ。

最早や、後悔する事は止めて、せめて武田先生の筆をかり、讀者と共に故先生の風貌を想起しつゝ、その冥福を祈りたい。

「肉の厚い顔、濃い眉、鋭く切れ上つた眼、強情さうな口もと、その何處にも負傷者らしい痕跡はない。荒い呼吸で、赤らんだ胸が上下するが、相變らずガツシリと肩を張つてゐる。……」



學 校 訪 問

(京 都)

東 山 高 等 學 校

玄關に案内を乞うた私は、美しく拭き清められた廊下をよぎつて校長室の人となる。先ず白壁にかけてある初代校長大村桂巖先生以下、歴代校長の寫眞に視線が注がれる。順を追うてみてゆくと、現校長藤原弘道先生は第九代目ということに氣がつく。ゆつたりとソファに腰を降して窓外に眼をやると、春おそしと待ちかまえているような、つぼみのふつくらふくらんだ櫻の木枝を通して、新築な

つたばかりの校舎が、正面に大きく浮び上つて眺められる。赤瓦の屋根にクリーム色の二階建の校舎が、春光に照り輝いて美しい。既に休暇に入っているせいか、河の流れが耳に入る以外は、なんの音も聞えてこない静寂さである。机の上に置いてある「東山學園アルバム」を一枚々々めくつてゆく。學校行事の生々しい記録だ。そのなか、大村・定・江藤須賀の四前校長と現校長の五人がそろつて寫

つているのに眼がとまる。多分最近のものだろうが、なごやかな次第である。あとで聞いたことだが、アルバムにおさまっている寫眞は、この學園のクラブのホープである寫眞部の生徒諸君の手によつてすべて出來上つているとか、その腕前にはなみなみならぬものがある。興に乗じてみてみると、どこからともなくゴーン、ゴーンと梵鐘が餘韻を長くひいて響いてくる。多分南禪寺の鐘の音であろう。なんともいえない氣持だ。京都ならでは東京ではとても味わいえないものである。これは宗教々育に打つてつけの好ましい環境・雰圍氣と判斷せざるを得ない。京の街を北から南へ、なだらかな起伏をもつて走つている東山連峰のふもと、都心から少し離れた關係か廢墟はなく、水は清く空は美しく所謂山紫水明のただなかに位置するこの學園は、南禪寺と永觀堂という名利の間にはさまれ、名ある別邸にとりかこまれて居り、自然の美と宗教的傳統とに恵まれてゐる點で、全國一といつても過言ではあるまい。あれこれ考えてみると、「この學園の宗教々育は——」なんて、あらたまつて聞くまでもないこととも思えて

くる。孟母三遷のたとえでもないが、「環境は人を創る」ことを思えば、これ以上の立派な雰圍氣、環境はなからう。丁度その時、スリッパの音も急ぎ氣味に、先客との應待を終られた、長身で少し瘦せ方な藤原弘道先生が顔に微笑をただよわして入つてこられた。

理想を語る人は多い。然し語るは易く、行は難いのが世の常である。事實それが、どのように現實に行われているかということの方が、重要視されなくてはならない。私はそういう意味で、校長先生から宗教々育の實施面について聞くことに意を決した。

佛教精神に基づいて、知情意の三方面にわたる圓滿な人格をつくりあげてゆくのに、思想・情操・行動という三つの面から實施を行つていきます。

というのが、校長先生の答えである。

この學園では各年級通じて毎週一時間宛、宗教科の授業が行われている。ここでは佛教の思想を正しく理解するということに主眼が置かれている。佛教の信仰を強要するのではないから、信する・信じないということは第二義

的なものとされている。過去をふりかえれば廣く東亞の世界を潤し、わが日本の文化を培い、その根底となつてゐる佛教、對立しあふ二邊のどちらにもかたよらない中道の實踐を説く佛陀の教えに對する、廣い良識を持たすことに力を注いでいる。所謂正信に向ひうる素地をつくつて置くことによつて、迷信や邪教への通路をふせこうというのである。そうした正信に根ざす社會人としての在り方が、佛教のあらゆる文化財を驅使して佛えられてゆく。無我・寛容・憐愍・平等・奉仕・感謝等のうるわしい姿が、その精神を通じて生徒に示される。これは個人的・社會的實踐が根ざさねばならないところのものを先ず理解し、實踐のための根據としようというのであらう。

この京都の地に在る淨土宗關係の東山・華頂・家政等の學校が聯合して、祖山知恩院に毎月廿五日法然上人の御忌日を期し御影堂に集り、音楽法要を行つてゐる。あしかけ五年になると聞いて、實は驚き、敬意を拂つた次第である。どんなことをやつてゐるのかとちよつと首をかしげていると、この一月の實況

を録したテープレコードをかけて下さつた。實にフレッシュな感じを受け、激しい感動がわいてくる。「幸ある朝」の輪唱は實にあかるい。二部編成になる禮讃・念佛と、法要はだんだんクライマックスに達する。松濤基先生の作品によつて營まれるセレモニーの美しさは、必ず若い人をアツピールするに足る。若い世代の人々はこのような雰圍氣のなかで、豊かに宗教的情操が培れ、高められてゆくのである。

この學園では昨年の夏、生徒會主催の下に琵琶湖畔でキャンプを營んだことがある。キャンプの設営とその改善、日に三度の炊事、登山や水泳、ゲームなどの行動を通して、規律の遵守、環境の整理・耐忍持久・協同奉仕など意志の訓練に相當な成績をあげたのに氣をよくし、この新學年からグループの行動を中心として、意志をきたえ行いを正して行ふと、固い抱負をのべられる。自由の履きちがいやだらしなさが、こうした面から閉めだされてゆく。實にたのもしい限りだ。充分な成果を期待したい。現在八千名の同窓が全國各地で活躍している。



柘榴の花

今井宇三郎

夜來の雪がふわりとあたたかく積つてゐるのに、朝は雪晴れの美しい空だ。さつきまで吹きつづつていたように思える冷たい北風が本當に嘘のようにパタリと止んで、静かな陽射しである。遠く白雪をいただいた富士の美しい姿が、クッキリと青空の彼方に見える。

雲一つない大空から燦々たる陽の光を投げる太陽に、雪は忽ち淡く溶け始める。アスファルトの道路は洗われたように黒々とした姿を現わし、やがて淡藍色に渴いて、塵埃をとどめないすがすがしさが自ら道行く人の心を軽くする。ぬかるみの雪も、さすがに春雪の感じで、齒切れよく下駄の齒にふみくだかれていく。雑司ヶ谷のこのあたりには櫛の太木が多い。昨日までビュービューと北風に鳴つていた鍼の秀枝が、薄藍色の網目を張つて思ふ存分に陽の光を吸うてゐるようにジツとしている。その網目を見上げていると、大空の青さにみつめる眼頭がにじむ思いがする。それは春の氣配がしのびやかに寄る日である。こんなに静かでおだやかな日が、餘寒の尙きびしい二月三月にも、月には二、三度、或は一、二日續くようになるころには、きつと南の空の、水平線はるかであるが、春の雲の峯が

一つくらいは顔を見せているであらう。それは春尙浅く、春日遅々といった感じにふさわしい一日である。

こんな春日遅々たるところに、柘榴の木は、よろづの芽立ちに先驅けて、早くも小さな鍼のような芽を點々とつけているのである。春先きの雪と霜とを、この芽で凌ごうとするかのように鋭く且つ赤い。やがて春は干潟に満ち来る潮のような勢いで押し寄せて来て、桃の花房がふくらみ、櫻の蕾が重く垂れて、柳の緑が春風になびくころには、春は野に山にあふれてくる。冬中閉ざれていた人々も、ホッと息をつき、氣持の窓が開かれて、花見に行く時には、小さな柘榴の赤い芽立ちは忘れられている。しかし躑躅や藤の花が終つて花の饗宴が一應落ち着いてくると、柘榴のつややかな若葉がまた人々の眼をひくに違いない。何時の間にか、こんもりと幹や枝を覆うようになつた若葉が、赤いつややかさを、緑に衣更えして、しかも點々と朱房の蕾をのぞかせているのである。五月のさわやかな風が、木々の青葉若葉をそよがせ、緑がいよゝ／＼深くなるころには、柘榴の青葉は、つやつやした光をまぶしいほど反射する。秀枝の嫩葉は

まだセビヤ色を残し、朱房の蕾はその先が膨んで、薄い朱色の花びらを一寸とのぞかせている。遠くからでも、一目で柘榴の花だと知られるのは、若葉のもり上つた中に、點々と丹朱の花房をのぞかせているこぼれるばかりの鮮やかさからである。それは朱と緑の美しい配合の色である。

それは關西の南海に面した村であつた。とある一軒の古い家の庭に十五、六の飛石があつて別棟の厩に續いていた。その厩の屋根を覆うて柘榴の太い幹が斜に伸び、恰好な角度で木登りを待つていた。十ぐらいの少年が、スルスルとこの木に登つて、青葉の繁みから顔を出した。日焼けした顔に白い齒がチラリと光ると、手足を細枝に引搔れながらも、巧みに繁みを分けて屋根瓦の上に降り立つ。何時かいたずらして逃げまどつた蜂の巢を警戒しながら、兩足をふみしめて四方を見渡して後、五月の微風の中に腰をおろす。屋根瓦のぬくもりに、早くも初夏の到來を感じる。まぶしい五月の陽光が全身に燦々と降り注ぐと、微風にゆられて、花の香りが漂う。花房を手にとつて、薄紙のような花びらを一枚ずつ吹き流すと、黒褐色の蕊が丸く輪を描いて、鋭く切れこんだ六角の花萼の中に現れる。また池の花房を探つては花びらを吹き流す。はるかなる空の青さが眼に沁みると、臉を閉ぢて思うことなき姿となる。やがてごろりと背をもたせかけると、瓦のぬくもりがシャツを透して膚に感じられる。それはわたくしの遠い少年の日の思い出であつた。

柘榴の花の色は椿のように濃艶ではないが、木瓜の花のように輕

くはない。ただ堅い割にさけ易い木であると共に、重い花萼は少しの雨風にも他愛なく落ちる。ポトリ、ポトリと無慚なほど地面に落ちて、五月雨の霽れ間に、はね返つた泥砂にまみれながら、地上に花模様を描いているのも哀れである。やがて梅雨となり、夏となつて海に引かれる人々の注意からは、遠のいてしまふ。夏が終つて、自然が平靜に返らんとするころには、大きく蒼らんだ實が案外多く目につく。その實がやがて笑みはじけて、ガーネットの粒をのぞかせるようになると實に楽しい。うす黄色い膜を距てて行儀よく並んでいる赤い實を、一粒ずついいねいにはがして掌の上に置く。一膜はがせば、またきつちりつまつていける赤い實、それは限りなく出てくるように思われる。淡紅の様々な形をしたガーネットの小粒が、新鮮そのものの色艶と硬さで、掌に満ちてくるのは楽しい思い出である。それを一氣に口に入れると、甘酸っぱい味が舌の上を流れる。スーと吸つて吐くと、小さい種子と果肉の残滓が、淡紅色ににじんだまま一塊りとなつて出る。まだるい時にはうすい膜のまま噛るとホロリと甘く苦い。遠い故郷の過ぎし少年の日の思い出である。

春來り時至れば、東京の空の下にも柘榴の芽立ちは見られる。今年もまたつややかな若葉が見られるようになった。やがて朱房につつまれた花と緑の青葉との美しい色調をもつて、道行く人の眼をとどめることであらう。

實演幼兒童話

お山の幼稚園

石塚壽明



皆さん、今日は。今日は皆さん元気で幼稚園に來ましたね。此のお山のまた向ふの山の奥に動物村がありました。動物村にもやつぱり幼稚園があります。お耳が長くてお目々の赤いのだあれ、さう兎さんですね。ではワン／＼さう犬のわん吉、お顔とお尻の赤いのだあれ。さうお猿のキヤンちゃん、ブウ／＼、

豚のブーちゃん。ではお腹が大きくてボンボン、さう狸のボンちゃんですね。

「おーいみんなあつまれ！」

「僕も仲間に入れてね」

「僕も仲間に入れてね」

「僕も、／＼」

「さう皆集つたら何かして遊ぼうよ」

「何しようかな／＼」

「さう／＼、ボンちゃんお腹が大きいだらう」

「だからお腹をたたいて皆で踊ろうよ」

「うん、それがいい／＼」

「おいボンちゃんお腹たたくのだよ」

「僕痛くていやだなあ」

「だめだよ早くやれよ」

「ぢや僕がたたくから、皆踊を踊るんだよ」

ボン／＼ボンポコボン……（ここで證誠寺

—狸ばやしの歌をボンポコでやる）

「やあ面白いなあ、次は何しようかな」

「そうだ、このお山の向ふには人間の幼稚園があるから、遊びに行かうよ」

「そうだ遊びに行かう」

「そうだお手々をつないで行こう」（ここで

お手々をつないでの歌を子供達と一緒に歌う）

「おや向ふの方に變なものがあるぞ」

「何があるの」

「何もないぢやないか」

「あるよ、そら松の木があるだらう」

「松の木は變なものではないよ」

「あの松の木まで競争しようよ」

「うんやらう用意——」

「駄目だよ用意で出てしまつては」

「もう一回やりなおし」

「用意ドン！」

皆はかけ出しました。

一等賞——（ここで耳のところに手をあげ次に目のところに手をつける）そう兎さんです。

ね。

二等賞、ワン／＼さう犬のワン吉君。

三等賞……（ここでお顔とお尻をなでる）さ

うお猿のキヤンちゃん。

四等賞、ブウ／＼さうブーちゃん。

一番おしまひ——（お腹に手をあてる）狸の

ボンちゃん。

「ボンちゃんだめだな」

「僕かけられないんだよう」

「おや、もう幼稚園だよ」

「ホラぶらんこもあるし、おすべりもあるよ」

「先におすべり乗ろうか」

「僕が先だぞ——」

「駄目だよ、けんかしたら」

「せいの一番大きい人から、せいくらべをしようか」

「やらう——」

「せいくらべだ——」（ここでのび上る）

「だめだよのび上つちや」

「せいのびしないで」（ここで頭のところ

に手を上げて横にする、これを右左にやる）

「僕が一番大きいぞ」

「一番大きいのはブーちゃん」

「さあブーちゃん早く上つて」

一段、二段、三段、四段、五段、六段（こ

こで手を交代にだん／＼上げて行く）

「さあ乗つたよ、すべるのだよ」

キュー

「やあ面白いなあ」

「こんどは誰」

「僕だよ」

「ワン吉君か」

「さあ乗つて」

一段、二段、三段、四段、五段、六段。

「乗つたよ」

「すべるんだよ」

「キューやあ面白いなあ」

あとから／＼すべりました。

「今度は何しようか」

「あつ、あそこにぶらんこがあるよ」

「さあ、ぶらんこだよ、僕が先だよ」

「僕だよ、——駄目だよ、けんかしては」

「こんどはジャンケンしよう」

「よしジャンケンだ」

「ジャンケンボンよ、あいこでしょ、あら

／＼だめよ、もう一度——」

「ヤーイ僕が勝つたぞ、僕が一番先だぞ」

「一番はボンちゃん。」

「さあボンちゃん乗つて」

では皆さん一緒にかぞえていただきますしよ

う。（ここで子供と一緒に数をかぞえます、

かぞえ終つたら眠つた真似をする）

「おやボンちゃん眠つちやつたよ」

「ボンちゃん——」

「ウウ……」

「おやもう乗つたのか」

「そうだよ、眠つたから分らないのだよ」

「こんどは誰……」

「僕だよ」

「お猿のキヤンちゃんだ」

「さあキャンちゃん乗つて」

「又眠つたら駄目だよ」

「大丈夫だよ」

「早く押してよ」

「ぢやあ、押すよ」(ここで又子供達と一緒に数を数へる)

「おやお猿さんも眠つちやつたよ」

「お猿さんおきなよ」

「ウウ……」

「僕も眠つちやつた」

あとから／＼仲良く乗りました。

カオ／＼

「おや夕方だよ」

「歸らうか」

「歸らう」

「お手々つないで歸りませう」(ここで夕

やけ小やけの歌を歌う)

「さよなら／＼／＼／＼」(手をあげなが

ら)皆楽しくお家へ歸つて行きました。

「お父さんお母さんただいま」

「おやボン吉どこに行つてたんだい」

「僕等幼稚園に行つたんだよ」

「何があつたの」

「ブランコとオスベリ」

「よかつたなあ、ぢや御飯にませう」

「いただきます」(この時に手を合せる)

兎さんのお家ではおうどん、ペロ／＼／＼
(この時にうどんを食べるまねをする)

「あゝおいしいなあ」

お猿さんのお家ではおすし、皆さんおすし
大好きですか。

「あゝおいしいなあ」(この時におすしを
つまんで食べるまねをする)

狸さんのお家ではおにぎり、こんなでつか
いの(この時に手をひろげておにぎりをつ
かんだまねをする)

「あゝおいしいなあ」

「ごちそうさま」(手を合せて)

「ぢや少し遊んだらおねんねませう」

「お父さんお母さんお休みなさい」(ここ
でねん／＼ころりよの歌を歌う。少し歌つ
たらだんだん小さくしてその時に手を頭の
うしろのところにあてて)……

皆よくおねんねしてしまひました。きつ

と明日の朝は早く起きて幼稚園に行つたでせうね。皆さんがよくおねんねしてしまつたのでお話もおしまひ。

(浄土宗児童教化員)

スガモブリズンより

山田 隆元

御惠送浄土御禮申上ます。私は、小僧の時、師より信仰は旅人の持つている雨傘のようなもので、平素は氣づかぬが、いざという時の安心になくてならぬものだと思ひました。戦犯で明日とも知れぬ死刑を待つ人々の中でも、平生信仰の心得を持つていない人は、焦りつゝも安心の境に入り切れぬのを見て氣の毒に思ひます。幼少の宗教々育の重大さを痛感致します。

私は陸軍抑留所の一分遣所長として終戦の年の物資不足のため所内に榮養失調死を出した責任から死刑を覺悟の所、二十年の刑になりました。其時思索の自由は人生を強くすると共に、信仰の強さを痛感しました。「生けらば念佛の功つもあり、死なば浄土へまいりなん」「先きだたば遅るゝ人を待ちやせん蓮の臺の半ば残して」の心で毎日を過しております。

芝園だより

○青葉の季節になりました。三線山の新緑の萌えるような美しさをみると、ああ今年もまた生きていてよかつたと、しみじみといのちのありがたさが身に沁みます。

○本誌の歩みも、今年からは宗務所より年間五萬圓買上げの好意ある裏付けを得て、どうやら常道となつて参り相です。きつと読者の中には、何だ今まではなかつたのかと思ひになる方が多いことも存じますが、既往は問わず一生懸命やりますから御支援下さい。

○發刊が遅れておりますが、これは印刷所の都合とはいえ、詮ずれば結局私達の責任、何とぞもうしばらくの御寛容を願います。

○賢順先生の一枚起請文は、NHKの宗教放送の最後を飾りました。(六月號より連載の豫定です)これには先生も大部苦心されたよう、私としては第二回目が最も熱が入っていたようでした。皆さ

んはどうお思いですか。

○お盆用のトラクトを考えておりますが、御意見を聞きかせて下さい。(竹中)

○近日、寺院の幼稚園、保育園の増設、新設が盛んで、誠に喜ばしい。東京のを拾つてみると、新設では赤坂幼稚園(阿川貫達)芝幼稚園(眞野正順)、増設では、大正大學明照幼稚園(石上教恩)明照幼稚園(佐藤良智)隆崇幼稚園(竹中信常)港幼稚園(北條淨善)駒込幼稚園(戸田恭善)福聚幼稚園(布施眞猛)等々である。

まだ／＼ある事でせうが一寸、私の知つてゐるのでもこんなにある事だから、さぞ全國にはたくさんある事でせう。読者の中にあつたら状況報告して欲しい。誌上で発表頂くのも大いに参考になる事でせうから。

○寺院復興も目ざましい。増上寺の屋根にも瓦がのつた。清水の寶相寺(中村康隆)では近代的な鐵筋の本堂が出来た。一つのモデル

として近々に誌上発表します。光圓寺(佐藤良智)でも着手された。蓋寺(大村桂巖)では五月三日落慶供養とか。新興宗教等モノの教ではない。

○新興宗教と言へばN・H・Kで「迷える羊」と題して放送する爲、録音機を竹中信常氏宅に持ち込んでいた。

又氏は四月十七日に學術會議研究發表会で「既成宗教と新興宗教について」發表された。

新興宗教訪問記は次號に掲げます。兎角、混迷期には人の心まで

が混迷する。目の先がチラ／＼するの無理はないが、現實相をじっくりと眺めたいもの。(安居)

○五月二日は故藤田寛雅氏の三回忌、懐しい風貌が目に浮ぶ。

○教學院の本年度計畫の一として昨年より懸案の淨土宗綱要の實現を期する事となつた。

○増上寺の御忌が四月十四日から三日間盛大に行われた。マイクとカメラに囲まれて散華雨ふる中を

○それにつけても、法要のあり方についてはいろいろ本誌上でも研究してみたい。

○本誌はスガモブリズン所在の田中・田端兩氏の文を中心に戦犯と信仰特輯を行つた。山田隆元氏は本宗僧侶で、所内信仰團體白蓮會にあつて熱心に指導に當つておられる。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(十共)。毎號定價三十圓十圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年四月廿五日印刷
昭和廿八年五月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

印刷所 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人遺仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 芝(四三)一三二八

浄土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 上二割引
百部以上 二割引

浄土編集部編

信徒必携

信徒としてせひ之だけは知つておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠数・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、五圓
三百以上 八圓
送、五十部 每

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。

法然上人鑽仰會

F・F・D幻燈機

○映寫機（ふつう映寫機と同じ性能）

ミナシキ……一二八八〇圓 送五〇〇圓

マスター……一三五〇〇圓 送五〇〇圓

○スライド（フィルム）

各卷三、四〇〇圓程度、數百種カタログ進呈、

○本會代理責任取次

飯田利行 共著

折口信夫 端作
佐々木一雄 恩地孝四郎 裝幀

正法眼藏の研究 最新刊

A5版二六〇頁 豪華版 定價五〇〇圓

送料五〇圓

道元の正法眼藏は曹洞禪の宗典としてではなく
世界の古典として、民主、共產兩社會より認めら
れつゝある。具眼の士よ、この寶藏を開き看よ。

發行所

千代田區神田
神保町一の九

廣文館